

# 大阪再生行動計画の実施による 将来の水質の見通し

# 大阪湾再生行動計画の実施による 将来の水質の見通し

- 各種施策の効果の程度を把握するため、目標の一つである「人々の親水活動に適した水質レベルを確保(指標: 表層COD)」について、達成の見込みと今後の課題を検討した。
- 海水の流れと富栄養化の機構を組み込んだ数値シミュレーションモデルにより、行動計画実施後を対象に、水質が最も悪化する夏季の概略的な水質濃度分布を予測した。
- 水質予測計算にあたっては、行動計画の施策のうち現時点で定量的に評価できる下記の施策の効果のみを対象とした。
  - 陸域負荷削減施策: 下水道・農業集落排水・浄化槽の事業、下水処理場の高度処理化など
  - 海域環境改善施策: 浄化型護岸などの整備や干潟やラグーンなどの整備

# 大阪湾への流入負荷量の変化(夏季COD)

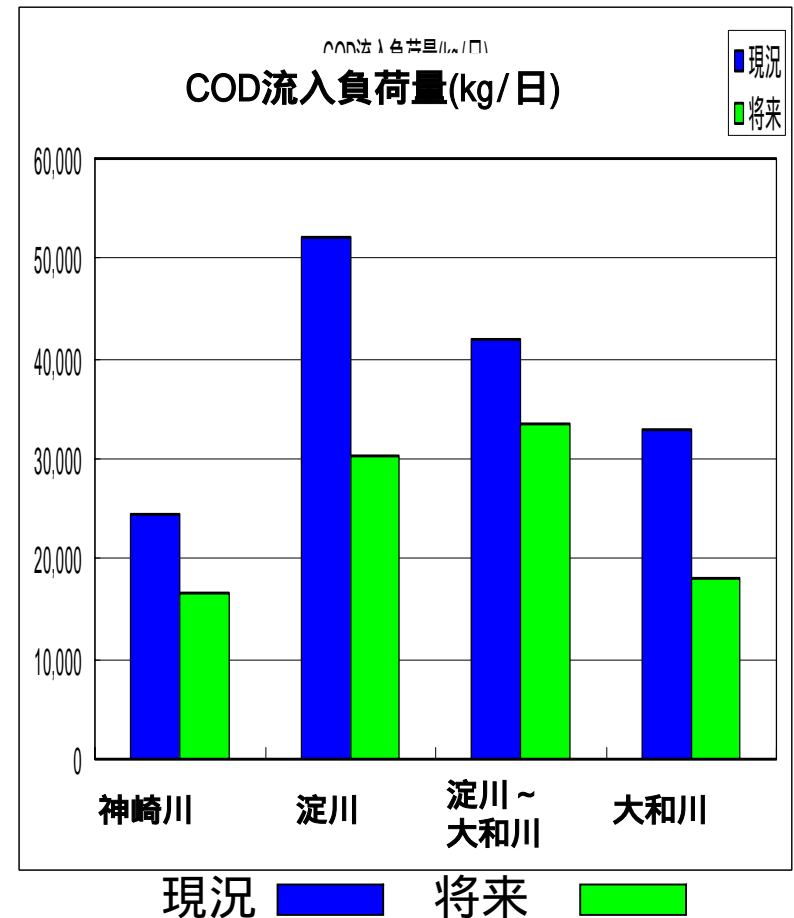
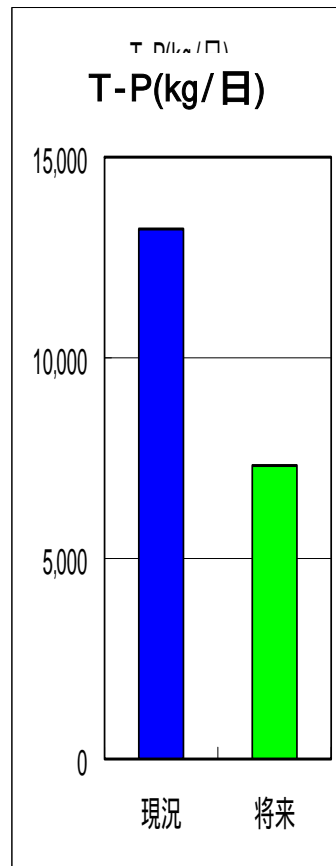
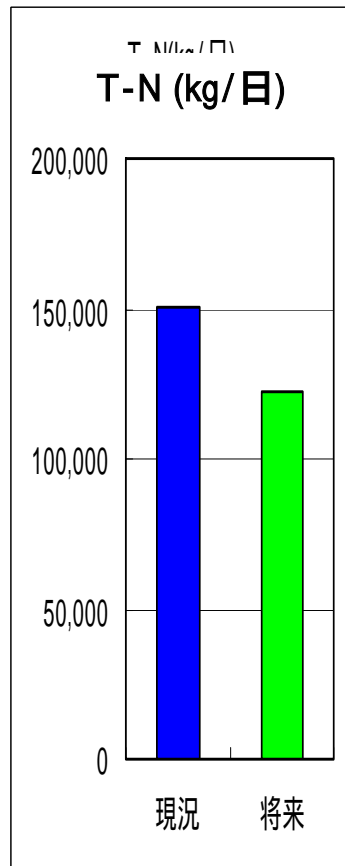
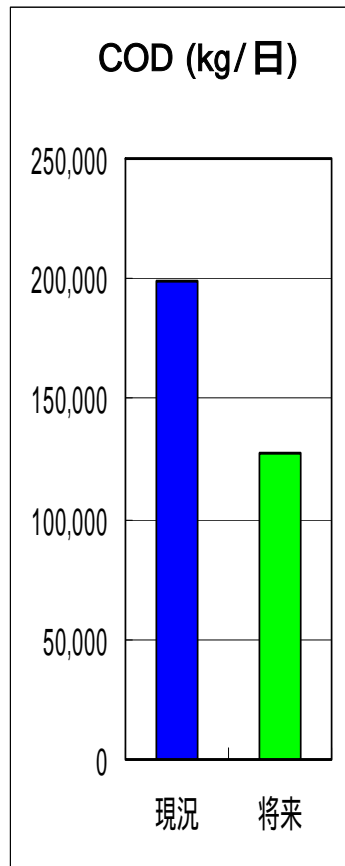
COD流入負荷量は、現況約200t/日⇨将来約130t/日  
(高度経済成長期のピークS48時点では約360t/日)

COD

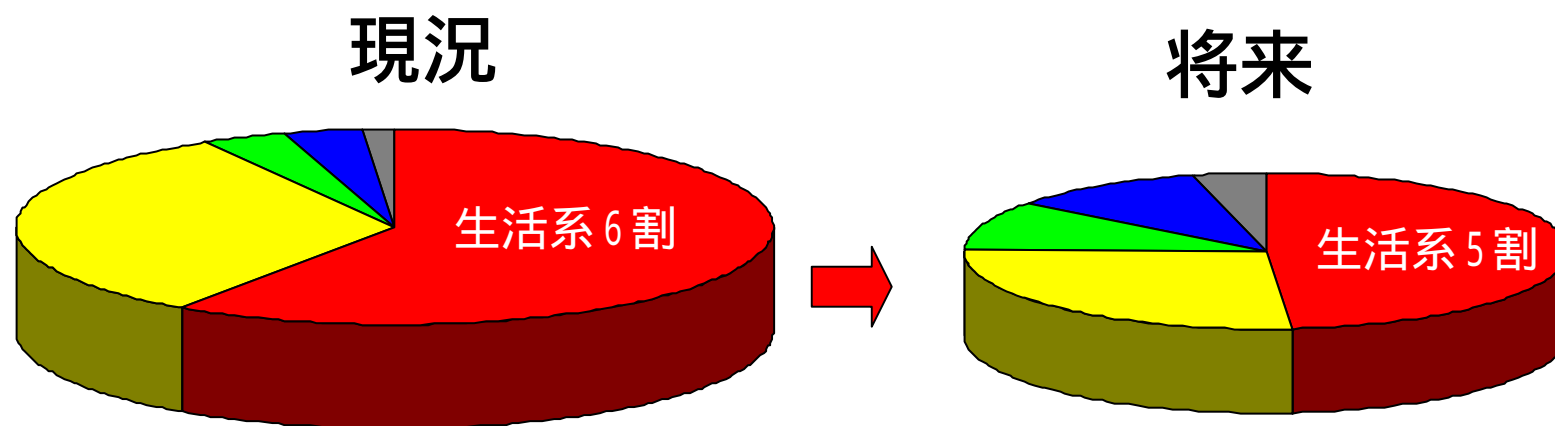
全窒素

全リン

主な流域の流入負荷量変化(COD)



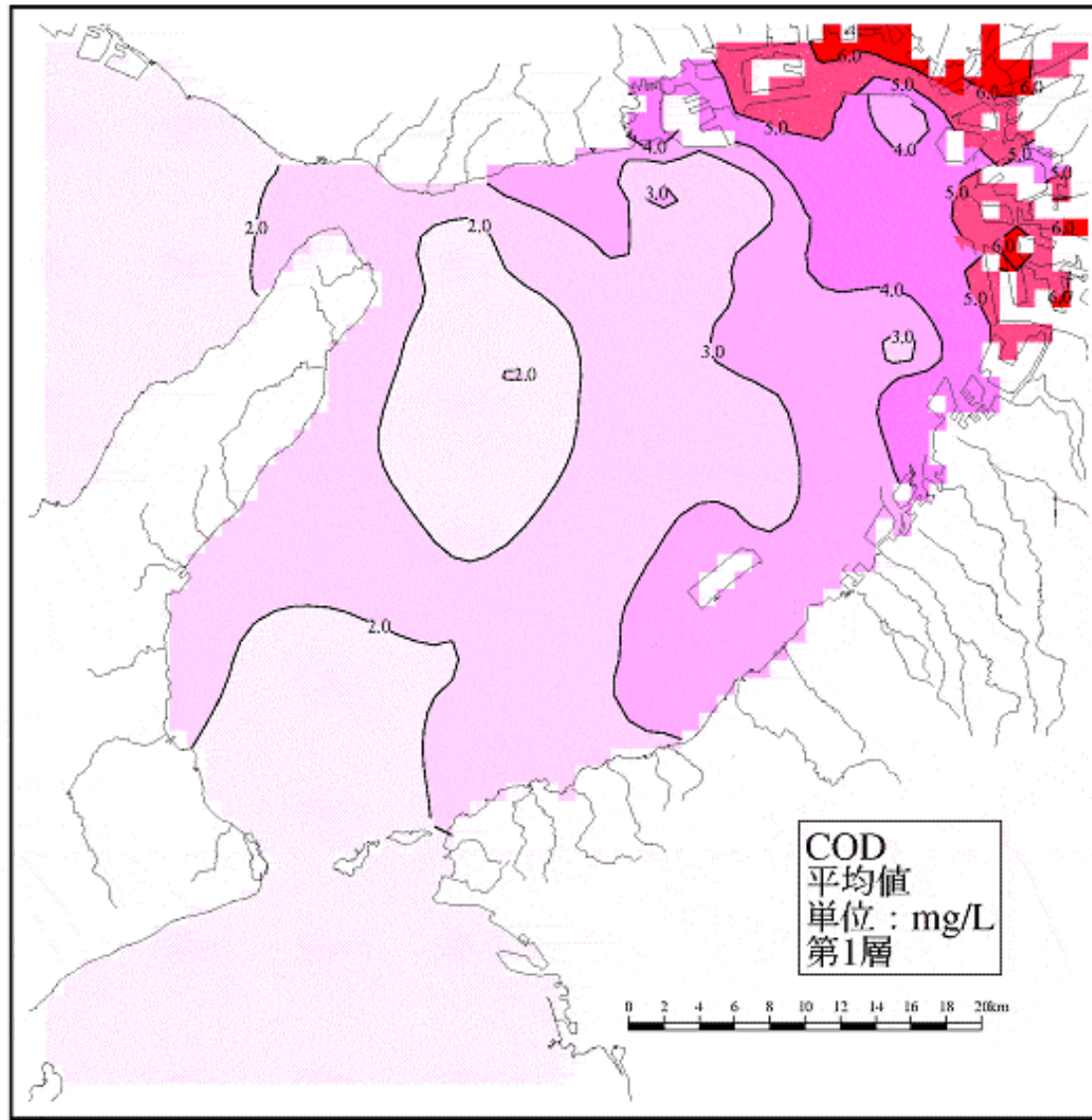
# 大阪湾への流入負荷量の内訳



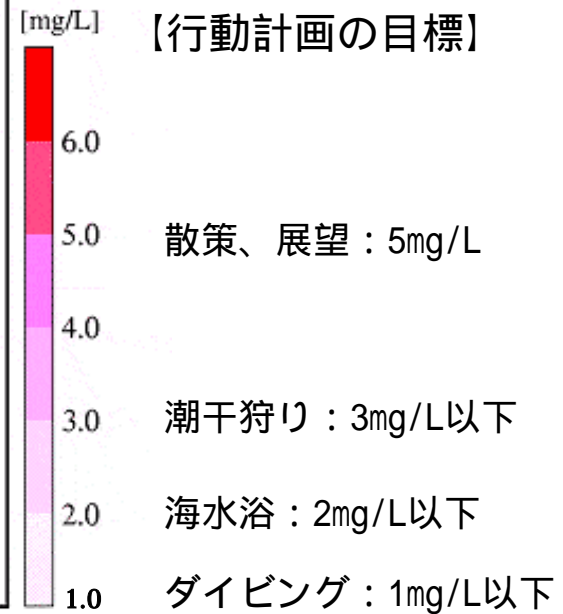
COD流入負荷量(日当たり)  
現況:約200t → 将来:約130t

- 生活系
- 産業系
- 畜産系
- 土地系
- 廃棄物系

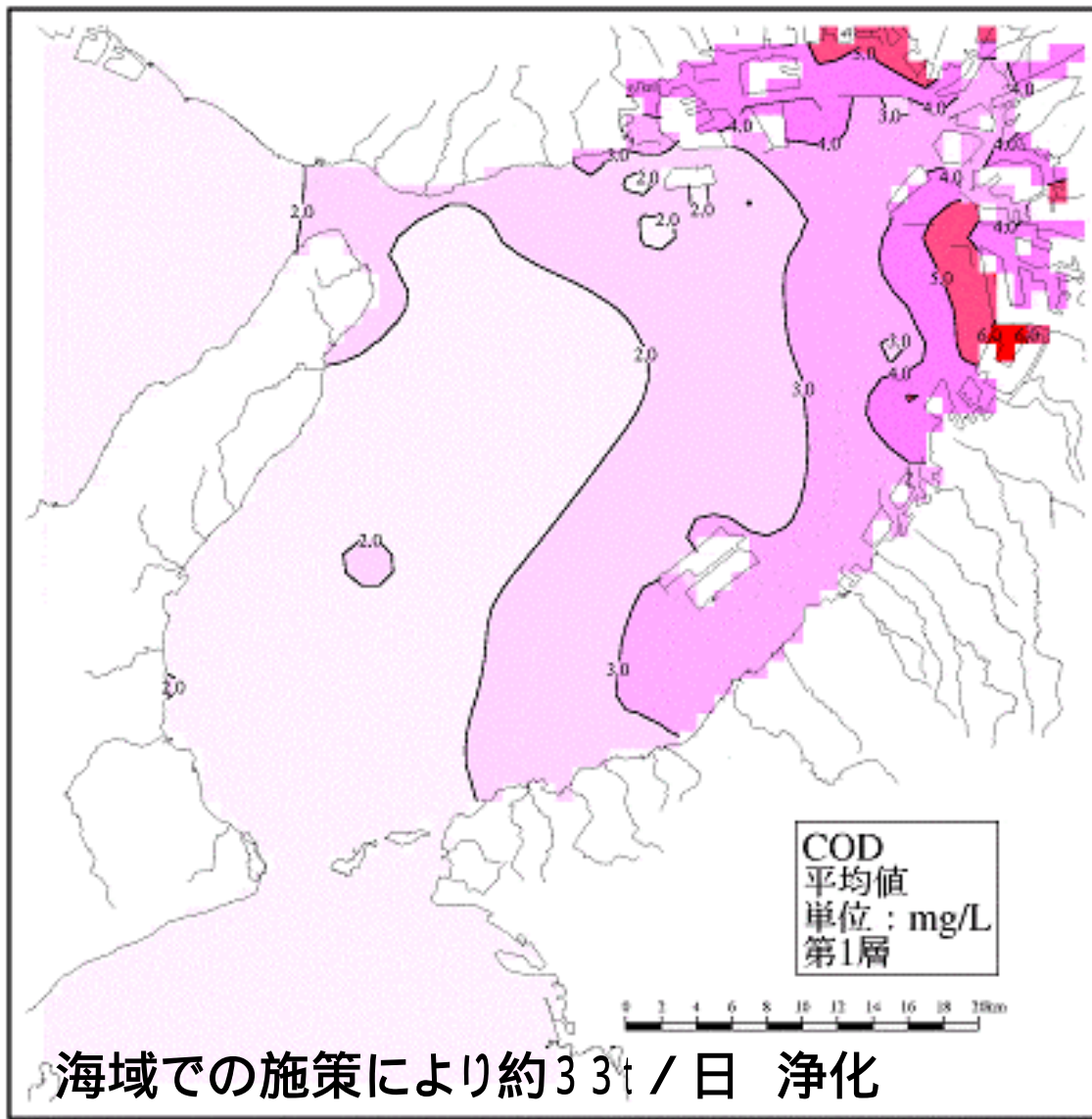
# 【現況（夏季）COD】



湾奥部は親水活動（散策、展望）に適さない海域（5 mg/L以上）となっている



# 【行動計画実施後（夏季）COD】



海域での施策により約33t / 日 浄化

親水活動(散策、展望)に適さない海域(5mg/L以上)の海域は約6割減少、前面海域が適さない海岸線の延長は約7割減少

淀川の河口周辺の大阪湾の水質(COD)は、3~4mg/L程度になる(淀川にアユがたくさん釣れていたところの大阪湾の水質になる見通し)

[mg/L] 【行動計画の目標】

- 6.0
- 5.0 散策、展望：5mg/L
- 4.0
- 3.0 潮干狩り：3mg/L以下
- 2.0 海水浴：2mg/L以下
- 1.0 ダイビング：1mg/L以下

湾奥部の内港部の一部では、5mg/L以上の海域が依然として残る

# 検討結果

- 本行動計画での各種施策の実施により、大阪湾に流入する汚濁負荷量は、高度経済成長期のピーク時の約1 / 3に減少
- 行動計画実施後の水質は、大阪湾全体で改善される

- しかし、湾奥の一部で人々の親水活動に望ましいレベルに届かない

# 今後の取り組み

- 大阪湾の水質改善を早期に実現するため、市民などと協働で幅広く取り組む
- 今後、生物生息環境(底層DO)をよりの確に評価するとともに、海域の内部生産の程度(陸域からの流入負荷や海域での植物プランクトンの増殖「内部生産」の寄与の程度)などを検討し、行動計画の適切なフォローアップに活用する